

修士論文(要旨)

2016年1月

日中接触場面における会話支援ストラテジー
—コンビニ商品開発タスク遂行過程の分析—

指導 宮副ウォン裕子 教授
言語教育研究科
日本語教育専攻
214J3005
中野愛弓

Master's Thesis
January 2016

Conversation Strategies used by Native Japanese Speakers to Assist Non-Native
Speakers Facilitate Execution of Product Development Tasks at Convenience Stores

Ayumi Nakano

214J3005

Master's Program in Educate School of Language Eduction

Japanese Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Won Miyazoe

目次

第 1 章	はじめに	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究動機	1
1.3	研究目的	3
第 2 章	先行研究	4
2.1	本研究における学術用語の定義	4
2.1.1	コミュニケーション・ストラテジーの定義	4
2.1.2	会話支援ストラテジーの定義	4
2.1.3	意味交渉の定義	5
2.2	調査協力者の定義	5
第 3 章	調査概要	7
3.1	調査対象者	7
3.2	調査方法	7
第 4 章	会話データの分析	9
4.1	分析方法	9
4.2	分析枠組み	9
4.3	グループ A の使用するコミュニケーション・ストラテジーの種類と使用頻度	11
4.3.1	グループ A の日本人日本語母語話者の種類と使用頻度	11
4.3.2	グループ A の中国人日本語話者の種類と使用頻度	17
4.4	グループ B の使用するコミュニケーション・ストラテジーの種類と使用頻度	20
4.4.1	グループ B の日本人日本語母語話者の種類と使用頻度	20
4.4.2	グループ B の中国人日本語話者の種類と使用頻度	25
第 5 章	考察	30
5.1	グループ A の考察	30
5.2	グループ B の考察	30
5.3	日本人日本語母語話者の全体の特徴	31
5.4	中国人日本語話者の全体の特徴	33
第 6 章	タスク調査後の聞き取り調査	35
6.1	調査概要	35
6.2	分析	35
6.3	考察	44
第 7 章	まとめと総合的考察	46
	参考文献	
	資料	

近年、母国での日本語学習後、日本へ留学に来る中国人日本語話者が増加している。また、日本人の中で中国語を学習する人や中国へ留学する人も増えている。その一方で、日本語母語話者の中には、海外留学や日本語教育、他言語学習や異文化には興味がなく、外国人と会話をしたことが一度もない人もいる。このことから、日本に留学中の中国人日本語話者(以下、CJS)が接触する日本語母語話者(以下、JJS)は、異文化接触の頻度の差、異言語への興味の差などにより、多種多様なコミュニケーション行動をするであろうと推測できる。本研究はこのような疑問に端を発し、CJSとJJSが参加する接触場面を解明することを目的とする。具体的には、(1)両者はどのようなコミュニケーション・ストラテジー(以下、CS)を使用しながら会話を続け相互理解をし、課題を達成しているのか、(2)その相互行為の特徴は何か、を調査・分析する。

本研究では、JJSの調査協力者を(1)日本語教育関係者ではないこと、(2)中国語学習経験がないこと、(3)留学経験がないこと、の3点に該当する人を対象とし、CJSとペアでコンビニデザートの商品開発を45分間で行ってもらった。このタスクで、(1)購入者のターゲット(年齢・性別・職業等。複数の対象者でも可)、(2)コンビニ内の商品を置く位置(人気商品の近く・冷凍ケース近く等)、(3)商品の独創性・オリジナリティ(他の商品(既存商品や他デザートの既存商品)と違うところ)、(4)商品の特徴、(5)商品のキャッチコピー、(6)商品の宣伝・販売促進方法とその戦略方法、の以上6点について考えながら、対話をしてもらった。

研究の分析対象としたデータは上記のタスク遂行過程の会話を文字化したものである。分析の枠組みは、柳田(2009, 2011)および一三(2002)のものを援用し、発話カテゴリーの、情報を提供する「情報やり場面」と、情報を受け取る「情報とり場面」に焦点をあてる。

分析の結果、JJSは、(1)確認チェックを使用し、CJSの発話に関心を持って聞いている(2)確認チェックと援助発話を使用し、自身とCJSの両者の認識の差、理解の差を埋めている、(3)CJSからの援助発話には答えられる場合と答えられない場合がある、の3点が明らかになった。CJSは、(1)社会的立場、(2)双方向性タスクの経験の有無、(3)日常的に求められるもの、の3点により説明要求、確認チェック、援助発話の使用頻度が異なることが明らかになった。

問題点では、(1)CJSは自身の日本語能力の自信のなさ、いらだち、面子、JJSへの遠慮や配慮により、自身の知らない語彙を、ストラテジーを使用し解決するのではなく、話の文脈から予想し会話についていくこと、(2)JJSは外国人と会話することに慣れていないために、CJSからの援助発話に答えることが困難な場合があること、(3)JJSの専門的な発話にCJSが混乱し、援助要求がしにくくなることの3点であると思われる。

今回行ったタスクは、(1)知識的にも現実的にも難易度が高く、(2)比較的非現実的に寄るタスク活動、という2点の問題点が発見された。双方向性タスクの今後の課題点として、現実と非現実の差があげられる。

今回のタスクの調査協力者を、JJSの調査協力者を留学経験のない、海外に関わりのない人に依頼した。今後は、留学経験と中国語が話せるJJSとCJSに、同様のタスクを行い、比較したい。また、ただ商品のアイデアを考えてもらうだけでなく、その開発した商品を専門の人に見てコメントを貰い、また改善するタスク内容に変更し、会話支援ストラテジーを使用する頻度が増えるよう設定を改善したい。

参考文献

- 青木直子・尾崎明人・土岐哲 (2001) 『日本語教育を学ぶ人のために』 世界思想社
- 大平未央子 (2000) 「日本語の母語話者と非母語話者のインターアクションにおける相互理解の構築—関連性理論の観点から—」 『日本語教育』 105, 71-80, 2000-04
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』 にほんごの凡人社
- 岡崎眸 (1990) 「第二言語習得の飛躍を目指す上級指導—討論活動のあり方—」 『日本語教育』 71 pp134-146
- 尾崎明人 (1998) 「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育—コミュニケーション・ストラテジー研究の概観—」 『日本語教育通信』 32 pp12-13
- 谷莎 (2014) 「接触場面における上級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー」 『桜美林大学大学院言語教育研究科』
- 土岐哲 (1994) 「聞き手の国際化」 『日本語学』 13 卷 13 号 12 月号 pp74-80 明治書院
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』 ひつじ書房
- 鍋倉建悦編 (1990) 『日本人の異文化コミュニケーション』 北樹出版
- 野原美和子 (2000) 「学習者が自己修正時に用いるコミュニケーション・ストラテジーとは」 『岐阜大学留学生センター紀要』 2000 53-63
- 林里香 (2007) 「接触場面の意味交渉における発話意図と問題解決の関係」 『千葉大学人文社会科学』 14 98-111
- 細谷昌志編 (2006) 『異文化コミュニケーションを学ぶ人のために』 世界思想社
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」 『日本語教育』 64 pp13-26 日本語教育学会
- 堀口純子 (1990) 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」 『日本語教育』 71 pp16-32 日本語教育学会
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版
- 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」 『早稲田大学日本語教育研究』 1 pp71-89 早稲田大学
- 宮崎里司／ヘレンマリOTT編 (2003) 『接触場面と日本語教育—ニューズプニーのインパクト』 明治書院
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」 『世界の日本語教育』 1, 119-136, 1997-07
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」にタスクの種類が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 1 pp119-136
- 村岡英裕 (1999) 『日本語教師の方法論—教室談話分析と教授ストラテジー—』 にほんごの凡人社
- 柳田直美 (2011) 「日本語教育経験のない母語話者との情報とり方略に非母語話者との接触場面が及ぼす影響」 『日本語教育研究』 web 版, 2, 51-66